

ルイジアナにおける墓地植生

中 川 正

I はじめに	V-2 シーダー
II 墓地植生形成に関するモデル	V-3 サルスベリ
III ルイジアナ州の自然環境	V-4 モクレン
IV 調査方法	V-5 マツ
V 墓地植生の分布と自然環境	V-6 ライブオーク
V-1 地上被覆	VI 結び

I は じ め に

本稿は、合衆国ルイジアナ州における墓地植生を、とくに自然環境とのかかわりに視点を置き、地理学的に分析する。墓地植生は、人々の価値に従って形成された文化景観要素である。人間によって製造・加工された家屋、道路、フェンスなどの文化景観要素とは異なり、植物自体は、元来自然環境要素である。しかし、その植物が、人間集団によって墓地にふさわしいものとして価値付けられ、墓地に植えられたときに、墓地特有の文化景観要素となる。したがって、墓地植生は、自然的要素と文化的要素を同時に有する景観要素として、自然環境と文化景観の関係を考察するうえで、好都合な研究対象であろう。

では、墓地植生には、どのように自然環境が反映しているのだろうか。もし、自然環境が人間の行為を決定するのならば、墓地植生は、周囲の植生と大差のないものになるであろう。しかし、もし、人間の価値がすべてを決定するのならば、人々が周囲の植生と同じ植物がふさわしいと判断しないかぎり、墓地植生は自然条件とは無関係なものとなるであろう。しかし、現実には、ルイジアナ州の墓地植生は、周囲の植生と類似点もあり、同時に相違点もある。しかし、それだけの事実から、単純に墓地植生は幾分自然環境によって、そして幾分人間の価値によって決定されたと結論づけることは、「人間-環境」関係の論理に関する具体的な検討を欠いた短絡的な見解といわざるを得ない。科学的にこの問題を検討するためには、人間がいかに墓地植生を形成するのか、どのような意思決定がなされ、それに自然環境がいかにかわってくるのかに関して、論理的なモデルを構築し、それに基づいて現実のデータを分析する必要がある。

筆者は前稿において、文化景観を形成する際の個人の行為のプロセスを実践的推論としてモデル化し、それを文化景観分析に応用した¹⁾。そのモデルは、自然環境と文化景観との関係を植生形成プロセスの検討から導きだそうとする本稿の目的に合致する。したがって、本稿は、まず、実践的推論のモデルにおける自然環境の役割の検討を行ない、次に実地調査によって収集したルイジアナ州におけ

る墓地植生データをそのモデルを用いて分析することによって、そのモデルの有効性を検討する。

ルイジアナは、北緯29度と33度、西経85度と92度の間に位置する合衆国南部の一州であり、湿潤亜熱帯気候帯に属する。1980年における人口は約430万人、面積は日本の約3分の1に相当する12.6万平方キロメートルである。ルイジアナは、州の北部と南部による際立った民族構成のゆえに、文化地理学研究の格好の対象となってきた。北ルイジアナに居住する大多数の人々は、スコットランド系アイルランド人の血が色濃く混じったアングロサクソン系民族であり、彼らのほとんどは、保守的な福音派的プロテスタントである²⁾。これに対して、南ルイジアナに住む人々の大多数はフランス系であり、かつローマカトリックの信者である³⁾。これに加えて、ルイジアナ州の人口の30%を占める黒人は、主にミシシッピ川流域のプランテーション地域や、ニューオーリンズ、バトンルージュ等の都市に居住している。南ルイジアナにはかなりの黒人カトリックも存在するが、一般的に黒人の大多数は福音派的プロテスタントである。筆者はすでに、ルイジアナ墓地に関する一連の研究⁴⁾の中で、州の墓地景観の地域差が、この民族構成に対応していることを明らかにしたが、自然環境との関係を視点にした分析は行なわなかった。本稿は、前稿に欠けていたこの検討を補うものとしても、意義あるものであろう。

II 墓地植生成成に関するモデル

文化景観を形成するうえで、人間がいかなる意思決定を行なうかに関して、筆者はアリストテレスによって考案された実践的推論の応用を提唱した⁵⁾。実践的推論は、大前提、小前提、結論からなり、大前提は人間の価値・要求・信念、小前提はその大前提を可能にする諸条件、そして結論は行為であるとされている。すなわち、人が望み、その要求を満たす諸条件が整った時、人は行為をおこす。たとえば、人が墓地の木として柳がふさわしいと考え、望んだならば（大前提）、そのためには、柳が入手でき、景観協定などの規則に反せず、かつその墓地で柳が成育可能である等の諸条件が小前提として整わなければならない、それが満たされたときに人は柳を植えるという行為を結論としておこす。ここで、注目すべきは、もしその人が柳を生育させたいという望みをもたなければ、様々な条件は小前提にはならないということである。小前提がそのみで行為を引き起こすことはなく、人の要求・価値・信念が行為を生み出す最大要因であるといえよう。

さて、このモデルのなかで、墓地植生を生み出す人間の行為に自然環境がどのようにかかわってくるだろうか？まず、ある植生が生まれるためには、大前提として、その墓地を形成する人々が、その植生をふさわしいとみなし、それを導入したいという要求をもつ必要がある。人々は、自分の価値観に基づいて、自然環境の中からふさわしいと思われる植物を選択する。この意味で、自然環境として存在する植生は、人々に選択肢を提供すべき機会として捉えることができよう⁶⁾。

一方、人々がある植物を墓地内に生育させることがふさわしいと考えたとしても、それを可能にする条件が小前提として存在しなければならない。自然環境は、人間の要求の実現を許したり、阻害したりする条件となりうる。ある植物が成育するためには、それに必要な土地条件、気温、無霜期間、養分、降水量などの条件が整わなければならない、それが満たされない場合には、その植生は成立しえ

ない。とくに、ヨーロッパからの移民がマジョリティを占める合衆国では、母国でふさわしいとみなされている墓地植生を導入しようとしても、それが新大陸では、生育しえない場合がある。その時には、新大陸の自然環境が、人々の要求実現の阻害要因として働いたといえよう。

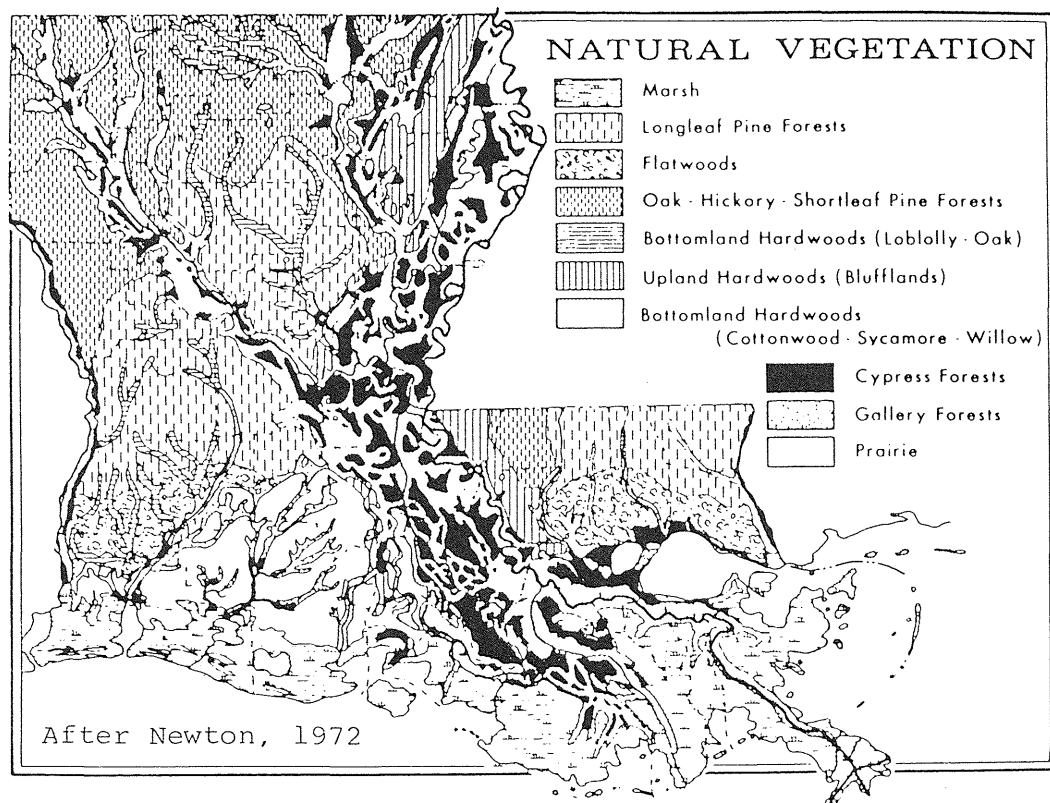
以上のように、大前提としての自然環境と小前提としての自然環境では、同じ自然環境という用語を用いても、その文化景観にかかわる意味が異なる。したがって、自然環境と墓地植生とのかかわりを考察する際に、この大前提としての環境と小前提としての環境の区別が不可欠となる。たとえば、ある暖地性の植物が存在する墓地の分布が無霜期間の地域的差異と対応していたとすれば、これは小前提としての自然環境が関与している可能性が高く、それはその植物の生育可能条件を調査することによって確認される。この場合に、その植生が自然環境要因によって決定されていると単純に記述することは、あたかも、人間の価値、すなわち大前提が自然環境によって形成されたという環境決定論的な説明がなされているとの誤解をもたらすことになる。この事例の場合には、その暖地性植物が無霜期間が短い地域の墓地に存在しない消極的な理由は説明できても、無霜期間が長い地域に存在する積極的説明とはならないという理解が必要である。なぜならば、その無霜期間が長い地域の墓地では、その植物以外にも様々な植物の生育が可能なはずだからである。したがって、その墓地にその植物が植えられなければならなかった積極的な理由は、人々がそれをふさわしいと考えたという価値（大前提）に求める以外にはない。人々は、数多くの自然環境要素の選択肢の中から、その植物を価値あるものとして選択した。その意味で、大前提にかかわる自然要素は、価値の対象となる可能性を有するものとみなされよう。

本稿では、以上のモデルにしたがって、大前提にかかわる自然環境と小前提にかかわる自然環境を区別し、ルイジアナ州の墓地植生の分析を行なうことによって、このモデルの実用性を検討する。

Ⅲ ルイジアナ州の自然環境

ルイジアナ州の自然環境は、住人が墓地に植物を生育させようとするときに、その植物を選択するうえでの選択肢となり、かつ住人が欲する植物の生育を可能にしたり、制限したりする条件となる。したがって、墓地植生の分析を行なう前に、それにかかわるであろうルイジアナ州の自然環境とその地域差を概観する必要がある。

ルイジアナは、日本の3分の1の面積を有しながら、最高標高が163mの平坦な州であるが、丘陵地、台地、氾濫原、マーシュ（木の生えていない低湿地）では、人間の居住や植物の生育条件が異なる。標高100mを越えることがまれな低くならかな丘陵地は州の北西部を占め、台地は西部および東部に広がっている。氾濫原はミシシッピ川、レッド・リバー、アチャファラヤ川とその支流や分流域沿いに、そしてマーシュは海岸沿いに広がっている。これらの地域の、気候、排水、土壌などの自然環境要素の地域差は、自然植生に最も端的に表現されている。ルイジアナの自然植生タイプは、大きく森林、サバンナ、草原に分類される（第1図）。



第1図 ルイジアナ州における自然植生の分布

出典：Milton B. Newton, Jr. (1972): Atlas of Louisiana, School of Geoscience, Louisiana State University.

森林地域は、台地性松林、台地性広葉樹林、低地性樹林地域からなる。台地性松林は、北西部、西部、そして東部の丘陵地や台地に広がっている。火に弱いヒッコリー、モクレン、オークとは対照的に、山火事に耐えることができる松、とりわけダイオウマツ (longleaf pine) は、墓地植生としても最も入手しやすい植生であろう。一方、オーク、ライブオーク、ヒッコリー、モクレンなどの台地性広葉樹林は、ミシシッピ川左岸のレス土壌地域と、州の北中央部を占めている。この中でライブオークは、主に州の北緯30.5度以南に生育し、冬期における気温が氷点を大きく下回る地域や、排水不良地には生育しない。これらの広葉樹林は、台地ばかりではなく、比較的高燥な自然堤防上にも生育し、排水の良さを示すよい指標となる。これらの高燥な、墓地の立地に適する樹種に対して、杉、ゴム、柳などの低地性樹林地域は、排水の悪い氾濫原の湿地 (swamp) に広がっている。これらの種は、湿地を適地とするわけではないが、湿地で生育しえない他の樹種の中であって、湿地に残っている。この湿地地域には、墓地そのものが存在しない。

フラットウッド (flatwoods) と呼ばれているサバンナ地域は、森林地域と草原地域の漸移地帯として、州の南東部と南西部に広がっている。この地域では、草原上に松、モチノキ、サルスベリなどが不規則に生育している。このサバンナ地域も、墓地の立地に適する場所であり、多様な墓地植生が

可能な地域である。

草原地域は、海岸プレーリーとマーシュからなる。ルイジアナの海岸プレーリーは、州南西部の台地上に広がっている。この平坦な草原地の土壌は、A層とB層の間に粘土層があり、その間の水の移動を妨げている。したがって、A層は極度に乾燥したり湿ったりする。この草原地域は、墓地の立地や墓地植生にとって理想的なところとはいえないが、少なくとも立地が可能であり、様々な植物の生育も可能である。一方、マーシュは非常に湿った草原地域であり、場所によっては土壌に海水の塩分を含んでいる。この地域において木の生育が可能な地点はシェニアー（chenier）とよばれる比較的乾燥した微高地のみであり、そこに希に、ライブオークやヤシの木が立っている。

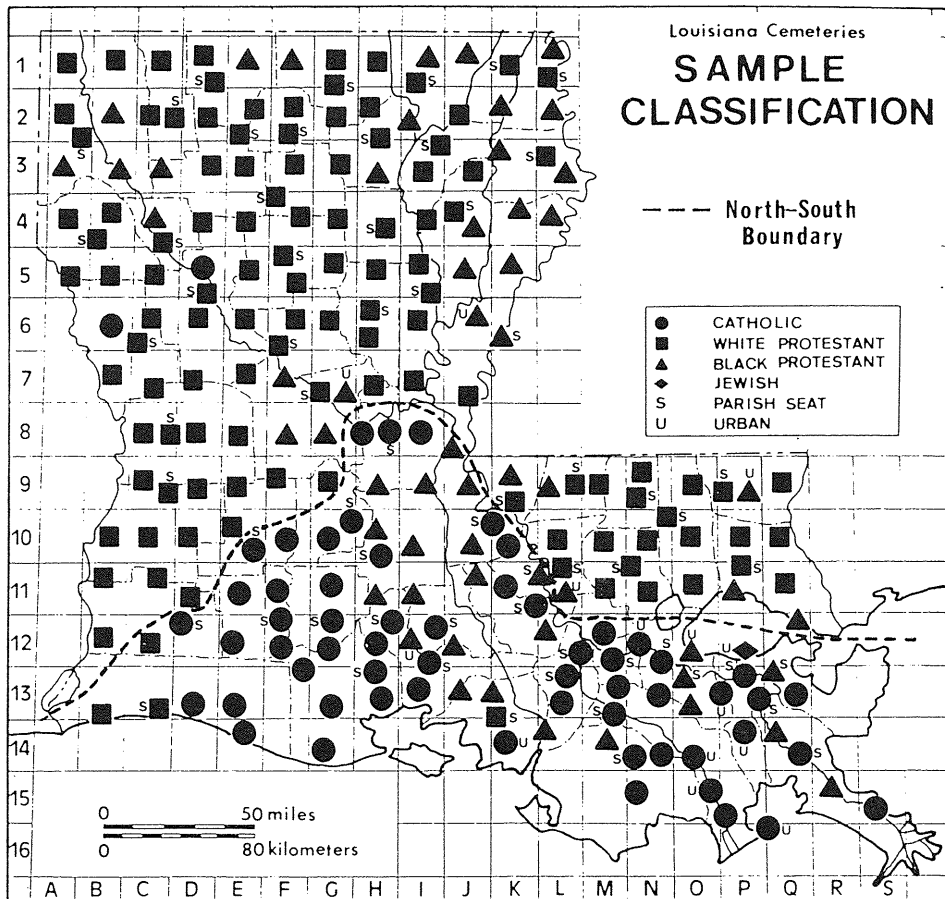
IV 調査方法

本稿で用いるルイジアナ墓地の植生に関するデータは、筆者が1985年12月から1986年5月にかけて行なったルイジアナ州全域にわたる236のサンプル墓地の総合実地調査から得られたものである。このサンプルの抽出は、ルイジアナ全域をおおい、カトリックとプロテスタント墓地、白人と黒人墓地、都市と農村墓地のすべてを含み、かつ主観的な偏りを最小限にするために、次のような基準によって行なわれた。まず、ルイジアナ州を覆う62,500分の1の各地形図から、その中心点に最も近い場所に存在する墓地が、それぞれ1つずつ抽出された。ルイジアナ州よりも他州にかかる面積の方が大きい地形図は、サンプルを抽出する地形図から除外された。それに加えて、分析の対象となるためには、その墓地が1930年以前に設立され、かつ調査当時においても使用されているものでなければならないこととし、最も地図の中心点に近い墓地がこの2条件を満たさない場合は、次に中心点に近い墓地を抽出することとした⁷⁾。この抽出方法でまず、178の墓地が選定された。

しかし、この方法では、サンプルに人口の多い都市や、地域に優勢な宗派の墓地が含まれていない場合が多い⁸⁾。この欠点を補うために、これらの抽出墓地に加えて、それぞれの郡庁所在地（parish seat）から、1つずつの墓地が抽出された。2つ以上の墓地が郡庁所在地に存在する場合には、その都市の性格を代表させると思われる墓地を、その起源、規模、人種、宗派等の観点から判断して選択した。この方法は幾分恣意的ではあるが、合衆国南部の郡庁所在地には、かならずといってよいほど、郡の中心的な墓地が設計されているために、代表的な墓地の選択は、ほとんど問題なく行なわれた。この第2のサンプリングによって58の墓地が加えられ、計236のサンプル墓地が決定した。

データの収集は、各々の墓地の観察、測定、聞き取り、写真撮影等の野外調査によって行なわれた。調査票には、墓地の所有者、人種、宗派などの社会文化属性に加えて、墓地植生をも含む景観要素が記入された。墓地植生要素としては、地上植生や様々な木の種類が調査項目に加えられたが、花卉類に関しては、季節によって観察条件が異なるために、今回の調査から省かれ、今後の課題として残された。

これらのデータを地図化するうえで、それぞれの墓地を形成する社会集団の属性を地図上に示した（第2図）。都市に立地する墓地は、“S”（郡庁所在地）や“U”（それ以外の人口1,000人以上の都市）の記号で表され、カトリック墓地（すべて白人が大多数を占める）は円形、白人がマジョリティ



第2図 サンプル墓地の分布

を占めるプロテスタント墓地は正方形，黒人のみによって構成されるプロテスタント墓地は三角形，そして，ユダヤ人墓地は菱形を用いて表現された．墓地植生のデータは，この地図上に記され，墓地を形成する社会集団の属性とも対照させ，その場所の自然環境を視点に置きながら分析された．

V 墓地植生の分布と自然環境

V-1 地上被覆

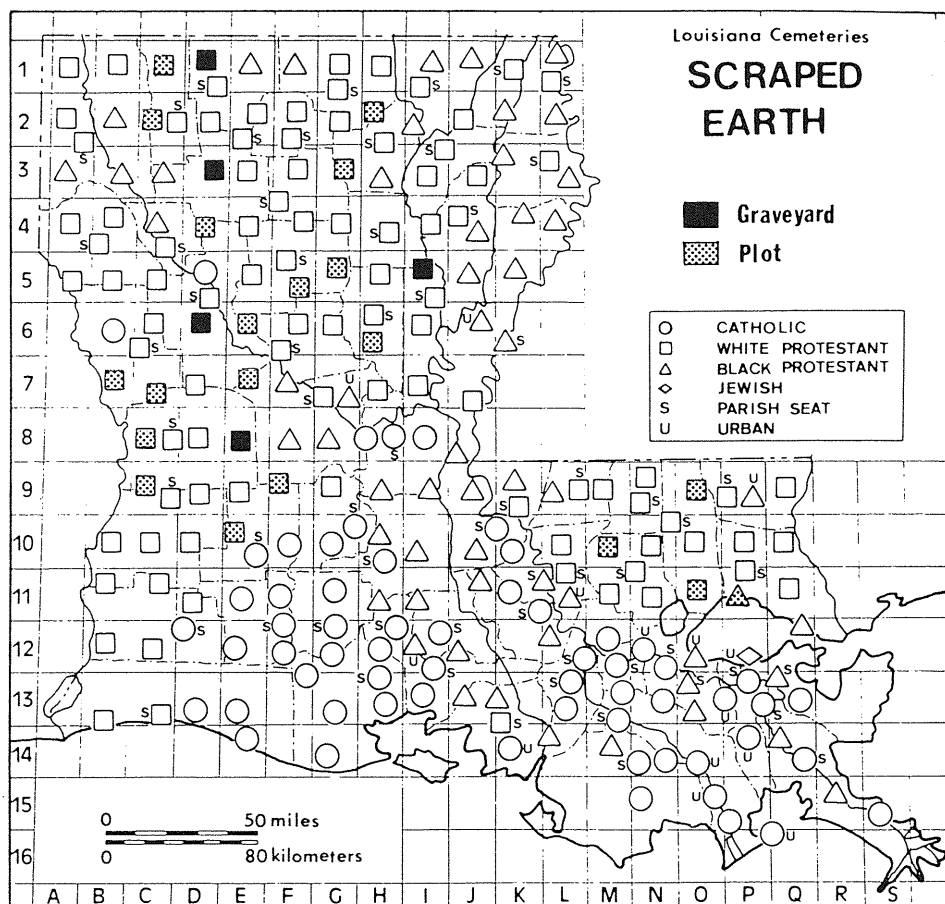
合衆国の大多数の墓地において最も目につく景観は，青々と広がる芝であろう．アメリカ人は，永遠のやすらぎの場所として，緑に包まれた田園的でかつ開放的な墓地を好み，そのような景観を形成するために，芝を最もふさわしく，かつ不可欠な地上被覆であると考えている⁹⁾(写真1)．その傾向は，ルイジアナ州においても同様にみられ，調査を行なった236墓地中，231墓地において芝が生育していた．年間降水量が1,000mmをはるかに下回るヨーロッパとは異なり，年間降水量が1,700mm前後という湿潤亜熱帯の条件下にあるルイジアナにおいて，芝は，夏期における成長が早すぎることで，手

入れを怠ったときに雑草が侵入することなどの理由により、維持しやすい植生とはいえない。ルイジアナにここまで圧倒的に芝が生育している要因は、やはり大前提として、人々が芝をふさわしい地上被覆とみなしているからであろう。小前提として、ルイジアナの気候は、この芝の生育を許しているが、芝の生育に最適であるというものではない。

地上被覆に関して注目すべき唯一の例外は、意図的に草を生育させず、かつ雑草を極力除去することによって、地面を剥き出しにするスクレーピング (scraping) と呼ばれる習慣である (写真2)。Jeane¹⁰⁾ は、このスクレーピングを、台地南部において共通してみられる伝統的な文化景観要素として位置付けている。毎年1～2回行なわれる墓地清掃の日には、墓地に生育する雑草はすべて根こそぎ剥ぎとられ、地面はその後には鋤によって平らに均される。このスクレープト墓地 (scraped cemetery) の中には、繰り返されるスクレーピングによって表土が失われ、粘土層が現われて、地表面がコンクリートのようになるところも多い。

北ルイジアナのいわゆる「台地南部」地域の農村部にも、かつてスクレープト墓地がしばしばみられたことは報告されている¹¹⁾ が、調査当時において、敷地全体がスクレーピングされている墓地は5つにすぎず、墓地の一部をスクレーピングしている事例も20にすぎなかった (第3図)。スクレープト墓地減少の要因のひとつは、若年人口の減少に伴って、コミュニティの紐帯が弱まり、共同の作業が消滅したことであろう。聞き取りによると、スクレーピングを手間のかかる作業として放棄する人々によって、共同作業が成り立たなくなり、芝を生育させ、賃金労働によって芝の管理を行なわせるコミュニティが増加した。さらに、他地方の墓地に関する情報の増加とともに、北ルイジアナの農村の人々が、緑の芝におおわれた墓地に憧れるようになったことも、スクレープト墓地の減少に寄与しているであろう。スクレーピングを望む人々は、自分の家族の埋葬範囲にのみスクレーピングを施すようになり、その結果、いくつかの北ルイジアナの農村墓地に部分的なスクレーピング景観が残存している。

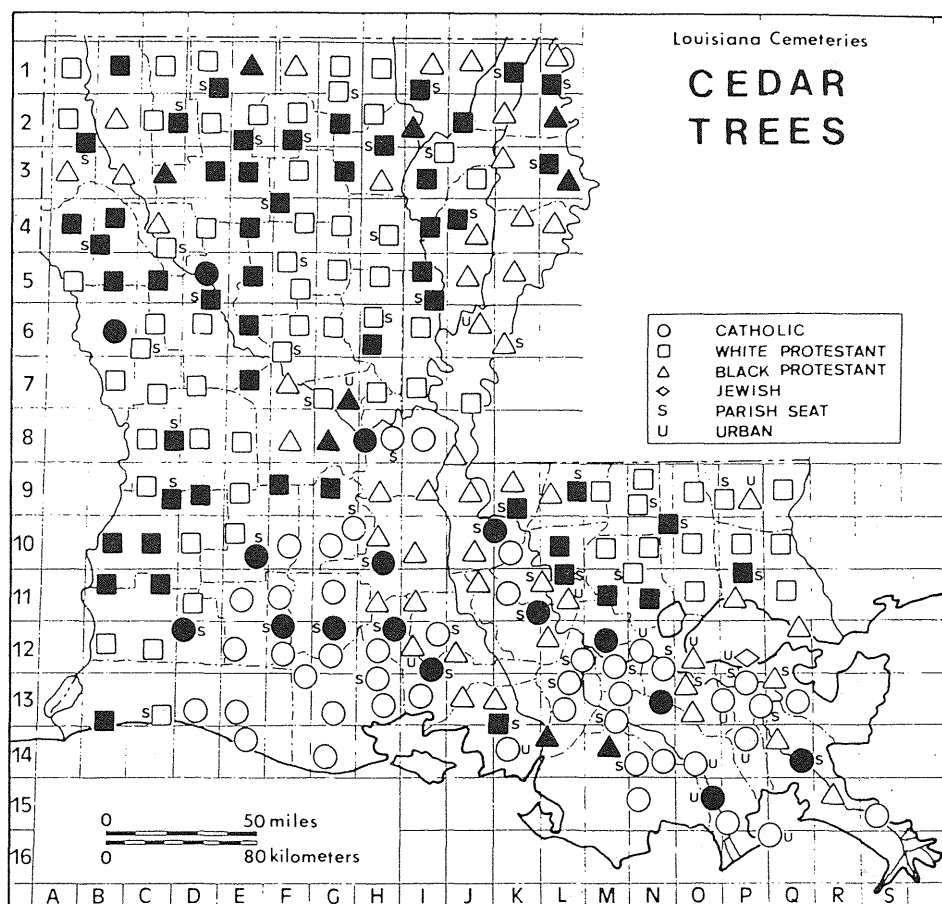
このスクレープト墓地は、南ルイジアナのフランス系民族が卓越する地域にはなく、台地南部文化地域にのみ存在する。この地域差は、自然環境の差異に基づくものではなく、人々の価値の差異に基づくものである。スクレーピングは、行なおうと願えば、ルイジアナのどこでも可能であるが、同時に非常に労力を必要とする、いわゆる自然に逆らった作業である。Jordan¹²⁾ は、テキサスにおける墓地景観の研究において、スクレーピングを行なっている人への聞き取り結果、「墓地がきれいにみえるから」、「みばえがよいから」、「習慣だから」、「死者を敬うため」等の答えを得ている。これらの答えは、いずれもその地域に伝統的な価値に基づくものであり、必然性に基づくものではない。Jordanは、このスクレーピングは、アフリカ起源で、奴隷の輸入とともに合衆国内部に移植されたのではないかと仮説を提示している¹³⁾。



第3図 スクレイプト墓地の分布

V-2 シーダー (*Juniperus* sp.)

シーダー (cedar) と呼ばれるヒノキ科の樹木、とくに southern red-cedar は、しばしば「墓地の木」として知られ、合衆国南部の墓地において最も頻繁にみられる木である。ルイジアナの墓地においても、シーダーは好んで植えられており、サンプル墓地の32%に存在する (第4図)。スギが墓地に好まれる木になったのは、イギリスにおける「墓地の木」であるイチイの機能を代替的に果たしていることによるものと思われる¹⁴⁾。イギリスにおいて、イチイは幸福、友愛、永遠の象徴として墓地において好まれ、しばしば2本を一对として墓や教会の前に植えられている¹⁵⁾。しかし、合衆国南部において、イチイが生育している地域は、わずかにフロリダの一部にすぎず、合衆国南部の環境には生育しにくい植物とされている¹⁶⁾。イチイがほとんど生育しないルイジアナにおいて、スギがイチイの代わりのシンボルとして、家、教会、墓の前に2本一对で植えられている場合が多い (写真3)。この対となるシーダーは、墓の前ばかりではなく、墓地中央の道沿いに植えられたり (写真4)、墓標として埋葬地の頭と足にあたる部分に植えられることさえある (写真5)。また、シーダーは1



第4図 シーダーの分布

黒く塗りつぶした記号は、シーダーを有する墓地を示す。

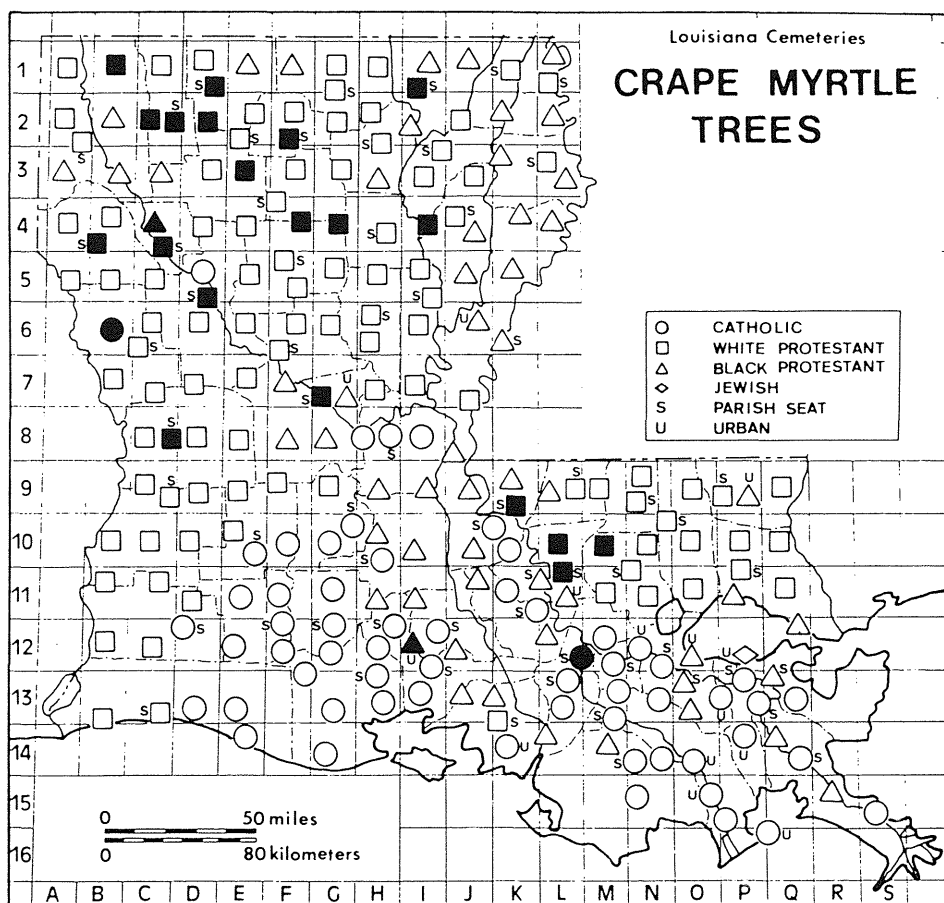
本だけで植えられることもあれば、墓地を囲む垣根として植えられる場合もある。シーダーの分布は、ルイジアナ全域にわたって、カトリックやプロテスタント両者にみられる。しかし、白人が大多数を占める墓地の38%がスギを生育させているのに対して、黒人墓地の13%のみがスギを有する。黒人墓地に、2本一對のシーダーがみられないことから判断すると、黒人墓地には、白人墓地にみられるような幸福、友愛、永遠といったシンボルとしての意味が存在しないのかもしれない。すなわち、白人がシーダーに墓地の木としての特別な意味を与え、積極的に導入したのに対して、黒人は、シーダーを墓地にもよくみられる樹種のひとつとして、また得やすい木であることなどの理由により、「ふさわしい木」として選択したものと思われる。

シーダーは、墓地を植える人々の行為にかかわる自然環境の要因を検討するうえで好事例となるであろう。ヨーロッパ系の移民たちは、イチイを幸福、友愛、永遠のシンボルとして、墓地にふさわしい木とみなしていたが、ルイジアナ其自然条件下においては、イチイの移植が困難であり、生育させられなかった。すなわち、小前提としての自然条件が大前提を満たすことができなかったために、行

為が生まれなかった。しかし、イチイと同じシンボルとしての意味を付与する対象として、新大陸の自然環境要素から新たにシーダーを選択し、それを、墓地の木として植林した。墓地に生育するシーダーは、このような意思決定のフィードバックの結果であろうと考えられ、そこに自然環境が小前提として、また大前提の対象として関連したと思われる。

V-3 サルスベリ (*Lagerstroemia indica*)

サルスベリは、サンプルの10%に相当する24墓地に分布している（第5図）。サルスベリはインドから移植された幹の細い落葉樹であるが、合衆国南部においては、公園、庭園、公共施設の庭、家庭の前庭などの装飾用植物として好まれている。墓地においても、台地南部墓地の特徴的な植生の一つとして数えあげられている¹⁷⁾。ルイジアナのサンプル墓地において、サルスベリは、北ルイジアナに比較的多く分布し、サルスベリを有する24墓地のうち、22墓地が北ルイジアナに分布する。また、サルスベリは、都市墓地に比較的多くみられ、サルスベリを有する墓地の割合は、都市墓地で17%であるのに対して、農村墓地では6%にすぎない。また、サルスベリを有する黒人墓地は2事例のみである。



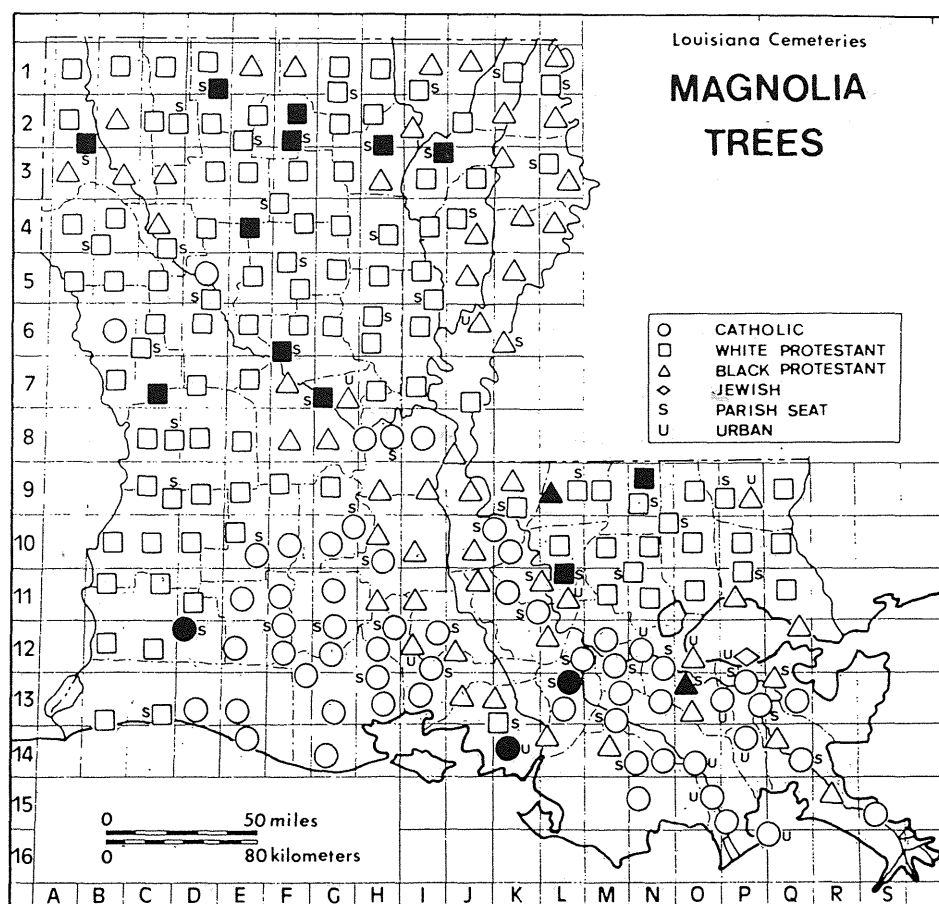
第5図 サルスベリの分布

黒く塗りつぶした記号は、サルスベリを有する墓地を示す。

これらの習慣の差異は、小前提としての自然環境の差異に基づくものではなく、大前提としての人々の価値の差異に基づくものと思われる。台地南部の都市の白人に、サルスベリが墓地にふさわしい木であるみなす人々が比較的多く存在することが、この分布に反映している。

V-4 モクレン (*Magnolia grandiflora*)

モクレンは、サンプルの7%に相当する17墓地に存在するが、その分布は北ルイジアナにも南ルイジアナにもみられる(第6図)。17墓地のうち、12墓地が都市墓地に分布し、また、15墓地が白人が大多数を占める墓地である。モクレンは、自然植生として比較的多く生育するミシシッピ川左岸や州の北中央部にも分布するが、とくにそのモクレンの生育最適地に集中しているというわけではない。調査を行なった236のサンプル墓地の大多数は、比較的高燥な微高地に分布しており、したがって、大前提としてモクレンを生育させたいという人々の願いがあれば、小前提としてモクレンの生育を妨げるような自然条件下にある墓地は少ない。したがって、このモクレンの分布は、モクレンを生育させたいという人々の価値の分布を示しているものと思われる。



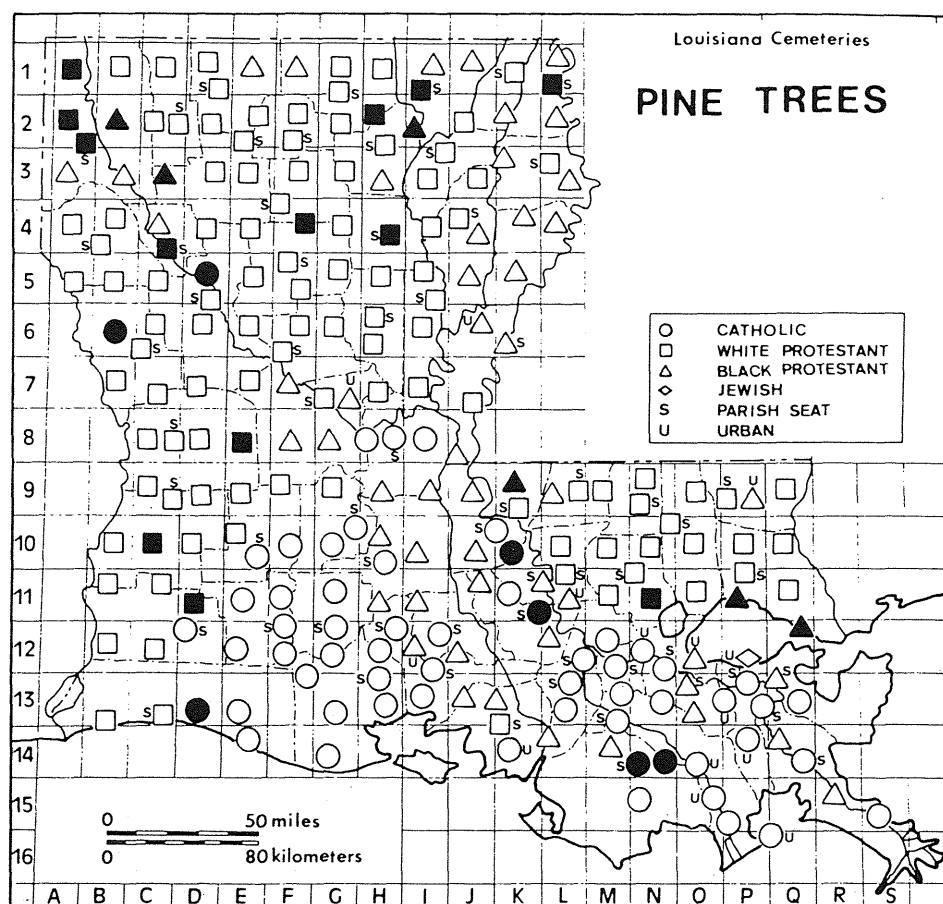
第6図 モクレンの分布

黒く塗りつぶした記号は、モクレンを有する墓地を示す。

スギやサルスベリとは異なり、モクレンは伝統的な台地南部の墓地に典型的な木として言及されていない¹⁸⁾。しかし、モクレンは、ルイジアナの「州の木」として様々な州の刊行物にシンボルとして用いられるばかりではなく、大学構内や公園、官公庁の前などに好んで植えられている。モクレンが都市の白人墓地に比較的多く分布していることから、モクレンが都市の墓地設計者によって、ルイジアナの墓地の木としてもふさわしいものと判断されたのかもしれない。

V-5 マツ (*Pinus* spp.)

サンプルの11%に相当する26墓地に存在するマツは、ほぼ州全域にわたって、宗派や人種、都市・農村にかかわらず分布している（第7図）。マツを生育させている墓地の分布地域は、必ずしも自然植生として台地性松林が卓越する地域に限らず、松林卓越地域の端や、マツが自然植生として生育しない地域にも及んでいる。筆者の観察や聞き取りによると、台地性松林地域では、人々は、墓地から



第7図 マツの分布

黒く塗りつぶした記号は、マツを有する墓地を示す。

マツを除去し、その代わりにスギやサルスベリ等の装飾用植物を植えている。したがって、その地域の墓地に分布するマツには、除去されずに残されたものが多い。これに対して、自然植生としてマツが卓越しない地域では、人々がマツを墓地に新たに植えた場合が多い。このことは、この両地域の墓地において類似した景観が、まったく異なった意思決定プロセスの結果であることを示している。松林地域では、人々はマツを墓地にふさわしくない木とみなし、除去しようとするが、労力やコストの問題で小前提がなりたらず、結果としてマツが残ってしまった。しかし、それ以外の地域では、大前提としてマツを墓地に植えたいという願いが、労力、コスト、マツの入手可能性、生育可能性などの小前提が満たされることによって実現した。なぜ松林が卓越しない地域でマツが墓地にふさわしい木であるとみなされるようになったかに関しては、今後の研究課題であるが、この地域では、シーダーと同様、マツが針葉樹林として永遠性などを象徴するシンボルとみなされるようになったという可能性もあろう。

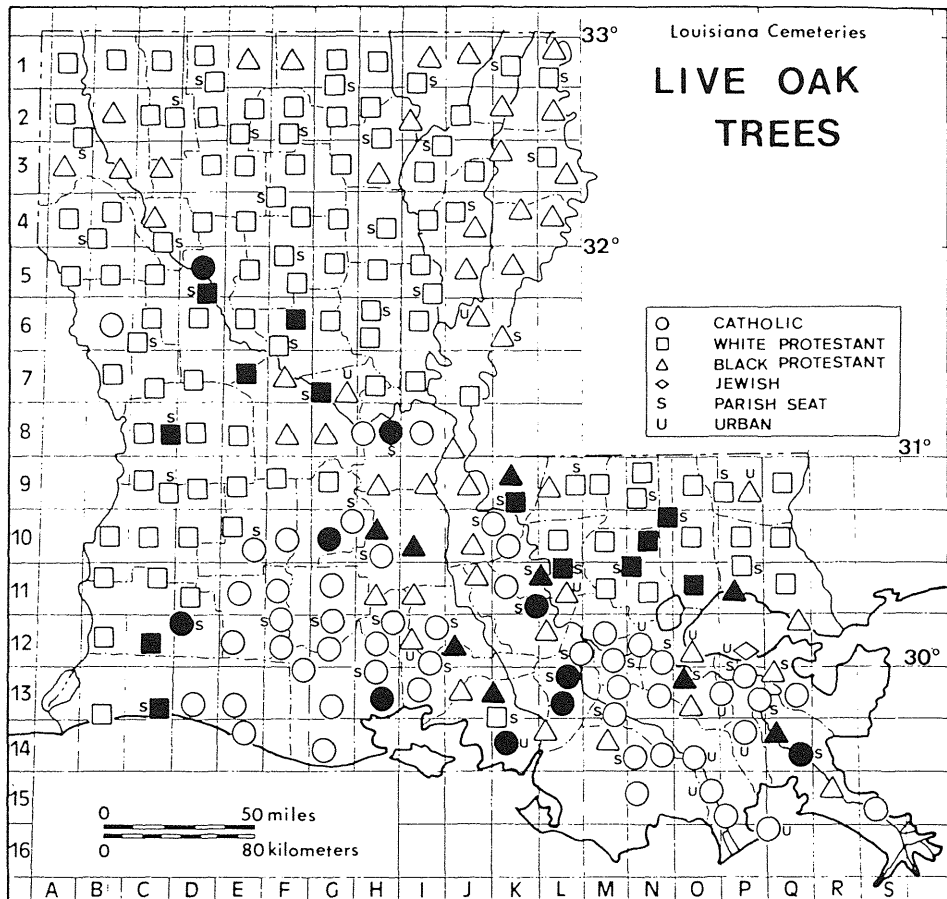
V-6 ライブオーク (*Quercus virginiana*)

ルイジアナにおいて北緯30.5度以南に自生するライブオークは、サンプル墓地においても、州南部に多く分布する(第8図)。ライブオークは、低地南部のプランターに好まれる木であり、プランテーションの庭、公園、墓地などにしばしば植えられる¹⁹⁾(写真6)。北緯30.5度以南では、ライブオークは低地南部人の墓地のみならず、カトリック墓地や黒人プロテスタント墓地にも分布しているが、北緯30.5度以北においてライブオークの生育する墓地は、低地南部のプランターが居住する地域に対応している。地図上で7Gと9Kに位置するプロテスタント墓地は、低地南部のプランター達によって設立された聖公会(Episcopal)教会のものであり、プランター達は墓地にふさわしい木としてライブオークを植えている。

このライブオークの分布にも、人々の意思決定プロセスを通じて、自然環境が関与している。ライブオークが自生する州南部では、ライブオークは墓地に植える木として、選択肢を提供していた。プランターのみならず、プランターの生活に憧れる人々などにライブオークは魅力的な木、ないしは墓地にふさわしい木であるとみなされ、植えられた。しかし、ライブオークの自生が困難な北緯30.5度以北では、墓地にライブオークを植えたいと強く願う低地南部のプランターや、彼らが比較的多く居住する地域に存在する他のプロテスタントやカトリックの白人たちによって、ライブオークが植えられた。この州北部の地域では、自然環境はライブオークの生育にとって好ましいものではなかったが、少なくとも生育を許す小前提を満たすものであった。

VI 結 び

本稿は、実地調査に基づくルイジアナ州の墓地植生データの分布を、とくに自然環境との関わりを視点として検討した。その結果、墓地植生は、周囲の自然環境とはほとんど異なる、墓地形成者の価値を強く反映する文化景観であることが確認された。地上被覆の芝は、湿潤亜熱帯気候下のルイジアナにおいて、必ずしも維持が容易な植生ではなく、また、地上被覆をすべて取り去るスクレーピングも、非常



第8図 ライブオークの分布

黒く塗りつぶした記号は、ライブオークを有する墓地を示す。

に手間のかかる習慣である。台地性松林地域に居住する人々は、意図的にマツを墓地から除去し、シーダーやサルスベリ等の装飾的な樹木を植えているのに対して、それ以外の地域には、わざわざマツを植林する人々もいる。また、低地南部のプランターたちは、ライブオークの生育が比較的困難であるとされている北緯30.5度以北においても、生育可能な場所であれば、ライブオークを植林しようという傾向があった。本稿で検討した墓地植生の分布は、自然植生の分布傾向とはかけ離れている。

ルイジアナの自然環境は、ある特定の植物を墓地に植えたいとする人々の願いを許したり制限したりする小前提として、この墓地植生の分布にかかわっていた。分布する植生は、自然環境に最適ではないにしても、少なくともその地域の自然環境下に生存可能な種である。低地南部のプランターたちは、北緯30.5度以北にライブオークを植えてはいるが、北緯32度以北にライブオークの分布がみられないことは、その地域で生育が不可能であるからであろう。また、イギリスで「墓地の木」とされているイチイがルイジアナでみられないことも、ルイジアナの自然条件が、その生育を許さないからであろう。

また、意思決定プロセスにおいて、人々がある植物を墓地にふさわしいとみなす大前提に、自然環境は、選択肢を与えるという関与をしている。イチイがルイジアナの「墓地の木」になりえないことが判明すると、人々は自然環境の中から、シーダーを「墓地の木」として選択し、ルイジアナの墓地に好んで植林している。しかし、この事実をもって、地域の自然環境が墓地の木を規定したと、決定論的な解釈をすることは不適当であろう。もし、自然環境が決定するのならば、その地域に卓越する自然植生が選択される可能性が高いはずであるが、実際には、シーダーは比較的希な自然植生要素である。人々は、自分の価値体系に基づいて、主体的に墓地植生を選択したと判断する方が適当であろう。

墓地の植生の分布に、自然環境以上に強く反映している要素は、墓地形成者の社会文化的属性であろう。北ルイジアナが属する台地南部文化的な要素として、スクレープト墓地やサルスベリがある。また、農村よりも都市に卓越する要素として、サルスベリやモクレンがある。さらに、黒人よりも白人に特徴的な墓地植生要素として、スクレープト墓地、シーダー、サルスベリがあげられる。人間の主体的な価値（大前提）が、集団によってパターンを形成する要因に関して、筆者は前稿²⁰⁾において、個人が文化景観要素を形成することによって、集団へのアイデンティティを表現しているとの仮説を提示したが、その詳細な検討に関しては別稿の課題となろう。

本稿で用いた実践的推論モデルは、人間の価値（大前提）に自然環境が影響を与える可能性を否定するものではない。なぜならば、このモデルは、人間の価値をすべての出発点として捉えており、その価値の要因を問題としていないからである。しかし、このモデルは、ともすれば文化景観の分布と自然条件の分布との相関から、両者の因果関係を安易に決定論的に解釈する傾向に批判を与え、少なくとも、小前提としての自然環境、大前提の対象となるべき自然環境は、決定論的な要因となるべきものではないことを示すものである。真に科学的な「人間－環境」関係のモデルは、人間の行為を生み出す大前提としての価値の重要性が発見されたうえで、構築されるべきであろう。

本研究の野外調査は、1984年度トヨタ財団の研究助成金（84-I-030）によって可能となった。記して謝意を表する。

注・参考文献

- 1) 中川 正 (1989): 還元主義的文化景観解釈法. 人文地理学研究, 13, 111-128.
- 2) Newton, Milton B., Jr. (1974): Cultural preadaptation and the Upland South. *Geoscience and Man*, 5, 148-150.
- 3) Newton, Milton B., Jr. (1987): *Louisiana: A Geographical Portrait*, 2nd ed. Geoforensics, Baton Rouge, 171-207.
- 4) 中川 正 (1988): ルイジアナ州アセンション郡における墓地形態－死の地理学序説－. 人文地理学研究, 12, 113-137.
- 中川 正 (1990): ルイジアナ州における墓上構築物と装飾品. 人文地理学研究, 14, 145-168.
- Nakagawa, Tadashi (1990): Louisiana cemeteries as cultural artifacts, *Geographical Review of Japan*, Ser. B, 63, 139-155.
- 5) 前掲1)
- 実践的推論を最初に文化景観の説明に応用した研究は,
Newton, Milton B. and Pulliam-DiNapoli, Linda (1977): Log houses as public occasions. *Annals of the Association of American Geographers*, 67, 360-383.
- 6) 前掲3), p. 72.

- 7) もちろん1930年よりも後に設立されたメモリアルパーク等の墓地も重要な景観要素であるが、それらは地域的、宗教的特徴を欠くために、総合的調査プロジェクトからは除外された。それらの分析に関しては今後の課題となろう。
- 8) たとえば、筆者が悉皆調査を行なったアセンション郡においては、85%の住民がカトリックであるにもかかわらず、プロテスタントの墓地の数がカトリックの墓地数の5.6倍になっている。ランダムサンプリングを行なうと、この郡の大多数を占めるカトリックの大墓地を、サンプルに含めない可能性が高い。前掲4), (1988), p. 119.
- 9) Bender, Thomas (1974): The "rural" cemetery movement: urban travail and the appeal of nature, *New England Quarterly*, 47, 196-211.
- 10) Jeane, D. Gregory (1989): The Upland South folk cemetery complex: some suggestions of origin. In Meyer, R. E. ed., *Cemeteries and Gravemarkers: Voices of American Culture*, UMI Research Press, Ann Arbor, p. 113.
- 11) Jeane, D. Gregory (1969): The traditional Upland South cemetery, *Landscape*, 18-2, p. 39.
- 12) Jordan, Terry G. (1982): *Texas Graveyards: A Cultural Legacy*, Univ. of Texas Press, Austin, p. 14.
- 13) 前掲12), pp. 14-16.
- 14) 前掲3), p. 85.
- 15) Cornish, Vaughan (1946): *The Churchyard Yew and Immortality*, Frederick Muller, London.
- 16) Harrar, E. S. and Harrar, J. G. (1946): *Guide to Southern Trees*. Dover, New York, pp. 96-99.
- 17) 前掲12), pp. 28-29.
- 18) 前掲12), pp. 28-29.
- 19) 前掲3) p. 137.
- 20) 前掲1)

Vegetation of Louisiana Cemeteries

Tadashi NAKAGAWA

This study examines how natural environment affects regional patterns of vegetation of Louisiana cemeteries. For that purpose, a model is created by examining a person's action of creating cemetery vegetation modeled on the practical syllogism. A person plants an element of cemetery vegetation (conclusion) when the person desires (major premise) and the conditions allow the person to fulfill the desire (minor premise). Natural environment is related in this person's action in two manners. First, as a minor premise, natural conditions allow or hinder the fulfillment of the person's desire. Second, natural environment gives an opportunity from which the person selects an element of cemetery vegetation according to the person's desire (major premise). The analysis was carried out by identifying these two forms of environmental elements in the distribution of vegetation species.

The vegetation data were collected through field survey of critically sampled 236 cemeteries. The elements of cemetery vegetation were mapped and were associated with such cemetery attributes as location, denomination, ethnicity, race, and urban-rural affiliation. The natural environmental factors were analyzed through the model of the practical syllogism.

As a result of the analysis, it is confirmed that the vegetation of Louisiana sample cemeteries strongly reflects the people's cultural value. Maintenance of lawns, the most typical

ground vegetation, requires laborious works. The scraping of the ground is also burdensome for local communities. People in the upland pine forest area plucked pine trees from the cemeteries, while some people outside the area planted pine trees. The Lowland Southerners plant live oaks north of the 30.5 degree latitude, where live oaks do not easily grow. The distribution of the cemetery vegetation elements discussed in this study is hardly similar to that of natural vegetation.

Louisiana natural environment affects the distribution by, first, allowing or hindering the fulfillment of the people's desire as a minor premise. Although existing cemetery vegetation is not always the most fitting species to the natural conditions, it grows because it can survive there. Although Lowland Southerners plant live oaks north of 30.5 degree latitude, the trees do not exist in the cemeteries north of 32.0 degrees because they cannot grow during the long frost season. Yews, known as the cemetery trees in the British Isles, are not planted in Louisiana cemeteries because the physical conditions do not allow their growth.

Louisiana natural environment also offers the opportunities from which people can select elements of cemetery vegetation. Because yews cannot grow in the most of the American South, people may have selected cedar trees as cemetery trees from the natural environment.

Cultural factors reflect to the regional cemetery vegetation patterns more strongly than natural factors do. The landscape elements associated with the Upland South include scaraped - earth and crape myrtle, while those associated with white cemeteries include scraped - earth, cedar, and crape myrtle. Urban cemeteries have more crape myrtle trees than rural cemeteries do. People tend to express their identity with certain groups through specific vegetation landscapes.

Practical syllogism, which presupposes the people's value as a major premise, does not explain the factors of the value. Therefore, it does not deny the possibility of natural influences on human values. However, this model gives an criticism of deterministic interpretation of cultural landscape only through superficial correlations between cultural landscape and natural environment. A scientific model on man - environment relations must be constructed under the appreciation of people's value which directly causes the creation of cultural landscapes.



写真1 芝の広がる典型的な台地南部墓地

合衆国の大多数の墓地は、芝を生育させ、田園な風景を示している。
(Many Cemetery, Sadine Parish ; 1985年 5 月撮影)



写真2 スクレイプト墓地

伝統的な台地南部の一部の墓地には、草を生育させず、一切の地上植生を取り去るスクレーピングと呼ばれる習慣が残っている。
(Old Sparta Cemetery, Bienville Parish ; 1985年 3 月撮影)



写真3 十字架形の墓石の両端に一对に植えられているシーダー

シーダーは、永遠の生命を象徴する「墓地の木」として、2本一对で植林される場合がある。

(Our Lady of Prompt Succor Cemetery, Iberville Parish ; 1984年4月撮影)



写真4 墓地中央の道沿いに2本一对に植えられているシーダー

(St. Mary's Cemetery, St. James Parish ; 1985年5月撮影)

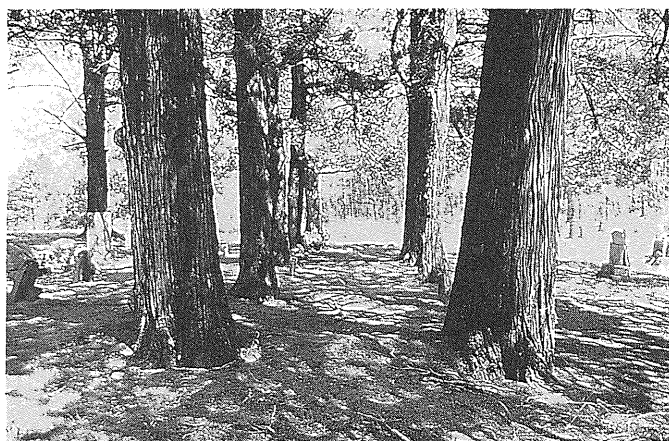


写真5 埋葬地の頭と足に2本一對に植えられているシーダー
(Old Sparta Cemetery, Bienville Parish ; 1985年3月撮影)

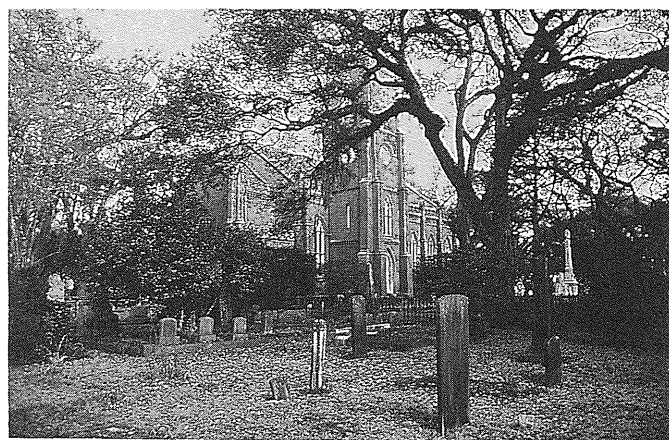


写真6 ライブオークの生い茂るエписコパル教会墓地
ライブオークは、低地南部のエписコパル派のプランターたちに好まれている。
(Grace Episcopal Church Cemetery, West Feliciana Parish ; 1985年3月撮影)